

人権ほつと五年四月号

3つの映画から

大阪教育大学 名誉教授

堀 薫夫

この年末年始に3つの映画を観た。これらを素材に人権問題を考えてみたい。

「ザリガニの鳴くところ」。

ノースカロライナ州で村の青年が殺され、その湿地で1人で暮らし、周りから偏見やDVを受けつづけてきた少女が、殺人容疑で逮捕され法廷に至るというもの。一九六〇年代のアメリカ南部にはびこっていた偏見を題材にしたという点で、人権問題をはらむ。さらには人権だけでなく、自然世界のルール（自然権）が優先される世界もあるということ。作者のオーエンズが六九歳で小説を書き始めたというのにも驚いたが。

「ラーゲリより愛を込めて」。第二次世界大戦終戦前後の、ソ連（当時）による日本人兵シベリア抑留とその家族との絆を描いた作品。アメリカによる原爆投下のもたらした悲惨さはよく知られているが、ソ連によるシベリア抑留

の話はあまり知られていないだけに、そこでの人権侵害ともいえる実情を描いた点で、人権問題と向き合う作品でもある。ミセスの Soranj iとともに、人びとの嗚咽が聴かれたのが印象的であった。

「スラムダンク」。三〇年前に流行ったバスケットボール題材アニメの新作であるが、ここで注目したいのは、この作品が韓国で日本映画の興行収入歴代1位の作品になったという点。徴用工問題などでの日韓摩擦があるなかで、若者を中心とした文化面での交流において、重い人権問題の雪解けに向かう方向を示したという点で、人権問題とつながりをもつだろう。

私たちの日常生活における何気ないメディア作品を紹介しても、人権問題を考えるヒントは多く潜んでいる。そうした問題を周りの人たちと話し合うなかで、人権意識の涵養も育まれてくるのではなからうか。